

としょかんNEWS 第111号



2016年6月29日
湘北短期大学図書館

学生選書ツアー参加者募集

学生選書ツアー【第24弾】を下記の要領で実施いたします。“学生選書ツアー”とは、図書館の利用者である学生自らが図書館にあったらいいと思う本、友達にオススメしたい本を、実際に書店の店頭で手にとって選書するという企画です。また、参加者の皆さんには、店頭で選書をするだけでなく、選んだ本を紹介するポップの作成など展示コーナーをトータルにプロデュースしていただきます。

ご参加いただいた方には、**湘北ポイント 100pt** とおしゃれグッズをプレゼント！お友達をお誘い合わせの上、是非ご参加ください。



- 日程: 8月9日(火)
- 時間: 10:00~12:00
- 場所: 有隣堂 厚木店

● 申込方法

選書ツアーに参加を希望される方は、申込みフォーム (<http://goo.gl/forms/1gPElgSYiT>) よりお申し込みください。申込期限は、**7月29日(金)**までとなります。詳細については、追って E-mailにてご連絡いたします。

さぼーち倶楽部、活動報告

● 新メンバーの歓迎会で、第12回ビブリアバトル開催！

さぼーち倶楽部が5月14日に新メンバーの歓迎会を行い、その中で第12回 ビブリアバトルを開催しました。さぼ部10名と図書館職員1名が参加し、総勢11名がそれぞれ持ち寄った本を紹介。今回は自己紹介を兼ねたビブリアバトルで、参加者の個性あふれる本が選ばれました。今年で6代目となる新メンバーのみなさん、よろしくおねがいいたします！

第12回 ビブリアバトル「チャンプ本」発表！

参加者全員で投票した結果、下記のとおりチャンプ本が決まりました。

★乙-『ZOO』-Tさん(P2)



何十年ぶりだろう。田植えを終えたばかりの「田んぼ」を見るのは。

この春から湘北で働くことになったおかげで、こんな風景に再びめぐりあえた。

通勤の足を止めて、水田に目をやる。水を満々と湛えた田に、稲が植えられている。

本当は、「稲が等間隔で整然と植えられている。」と書きたかったが、この水田の稲は、やや蛇行して植えられている。

“あめんぼう”が稲の間をスイスイと泳いで・・・待てよ、泳いでいるわけではないな、これは、水面を這っている？いや、「滑っている」と言っておこう。

田んぼの水は透きとおっていて、底の泥が見える。じっと見てみる。発見！

“おたまじゃくし”がいた。卵からかえったばかりなのだろう、非常に小さい。くねくねと胴体と尻尾をくねらせながら、水底の泥のうえを這って・・・いや、これは「泳いでいる」だろう。きっと。

子供のときに、“おたまじゃくし”をたくさん網ですくってきて、内緒で家のベランダの泉水に放ったことがある。やがて後足が生え、つぎに前足が生え、顔つきが丸から三角になり、最後に尻尾がなくなった。ある朝ベランダに出ると、泉水から飛び出したカエルがベランダ中を跳ね回っ

ていた。驚いた。“おたまじゃくし”と“カエル”似ても似つかぬ。まったくもって不思議な生きものである。

蛇足だが、母に叱られた。

だんだん、思い出してきたぞ。“ゲンゴロウ”“たにし”“やご”“いととんぼ”などなど。

田んぼは、いい遊び場だった。

そうそう、あれ、なんだったっけ。あれ、あれ、田んぼにいた、あのいかにも獰猛そうな形をした奴・・・、う～ん、出てこない。

図書館で、『田んぼの生き物図鑑』（山と溪谷社、2013年）を借りた。あった。写真入りで。“タガメ”だ。

“メダカ”ではない“タガメ”だ。名前の由来は、「田のカメムシ」だそう。カメムシ目コオイムシ科。体長 48mm から 65mm。日本最大の水生昆虫でカエルを食べるとある。カエルを食べるとまでは思っていなかった。「タガメ」はかつて田んぼを代表する昆虫であったが、近年はその姿を見る機会は稀となった。（中略）タガメの減少は、大規模に行われた農薬散布の影響が大きい。」とあった。

ここの田んぼはどうだろう。ちょっと、探してみたくなった。

【連載】リレーエッセイ(29) 部活高校生とニーチェ 総合ビジネス・情報学科 飯塚 順一

今から37年前のこと、都内にあるプロテスタント系キリスト教主義の高校に通う17歳の私は、勉強よりもはるかに水泳部の部活中心の学校生活を送っていた。男子校だったこともあり、だらしのないことこの上なし。今でも帰宅の際に小田急線や相鉄線で疲れ切った様子の野球部やらサッカー一部らしき高校生の集団を見ると、昔の自分の姿と重ね合わせてしまう。

さて、その私が通学していた高校には、「聖書」なる授業が必修科目として存在していた。その授業と担当していたのは、髪の良い若い女性教師であったが、私はその授業内容には全く興味を持たず、私同様の不真面目仲間と授業中も時間を持て余すありさまだった。

ある日、そんな我々に「フリードリヒ・ニーチェについて調べて発表するように」との課題が出され、私は仲間と共に目を白黒させながら、学校の図書室でああでもないこうでもないと言いながら、それまで聞いたこともないこのニーチェなる人物について関連する本を探しまくった。結局、

“フリードリヒ・ニーチェはドイツの哲学者で、キリスト教にとっては鼻持ちならない人間である”うんぬんといった幼稚な発表をしたのを覚えている。担当の若い女性教師は、まともに我々不真面目連中を諭しても効果は望み薄と考えたのだろう。こうした発表の課題を与えることで、我々が自主的にモチベーションを上げることを狙ったようだった。

この若い女性教師の作戦は成功し、これを機に我々不真面目連中の授業における取組み姿勢はすこぶる改善され、授業内容に熱心に耳を傾けるようになった。特に私は半年後には、高校生と中学生の全校生徒約1,200人が出席する毎朝の礼拝の司会者に抜擢されるほどになったのである。

遠い日の夕日が差し込む高校の図書室で、明らかにその場に不釣り合いな数人で“フリードリヒ・ニーチェとは・・・”などとつぶやきながら、お互いの額をくっつけるようにして困惑していたことを懐かしく、また嬉しく思い出すのである。